

2018 vol.41 春号 源流からのたより

# ぽたいたい!

源流のひとしづく



## CONTENTS

- ・事務局長コラム
- ・「源流学」⑯
- ・源流の主役たち
- ・丹治の瓦窯
- ・吉野川紀の川しらべ隊
- ・源流学の森づくり
- ・ギャラリー展



森と水の源流館

住所 奈良県吉野郡川上村宮の平  
公益財団法人吉野川紀の川源流物語  
TEL 0746・52・0888  
FAX 0746・52・0388  
URL <http://www.genryuu.or.jp>  
E-mail [morimizu@genryuu.or.jp](mailto:morimizu@genryuu.or.jp)

近畿ESDコンソーシアム

森と水の源流館

授業づくりセミナー

公益財団法人 吉野川紀の川源流物語 事務局長 尾上 忠大

ESDの視点を常に意識

ESD(Education for Sustainable Development)とは、持続可能な社会づくりの担い手を育むことを目的とした教育活動のこと。この言葉が初めて本誌面に登場したのは2016年の春先の号でした。それからさまざまな取組の中で常にこの視点を意識し、推進する団体やキーパーソンとのネットワークを広げるよう努めてきています。

2017年が明けて早々に「紀の川じり源流・川上村で研修会」を開催。同じ源流から水が届く異なる県から教員が集い、水のつながりをどのように授業にかかしているか、いかしているかについて体験の共有と意見交換を行いました。

現職教員による授業づくり道場!?

これをきっかけに、7月からは近畿ESDコンソーシアム(コンソーシアムとは、複数の団体からなる、連合・共同体という意味)による森と水の源流館授

業づくりセミナーがスタートしました。同コンソーシアムは、近畿地方全域を視野にESD推進の拠点作りを進めるしくみです。奈良教育大学に拠点を置き、ここではESDを実践できる教員の養成を目的とし、現職教員・教員を目指す学生向けセミナー・勉強会の開催、また学校現場等でのESD実践の支援、校内研修や授業研究等への講師派遣などの事業を行っています。



授業づくりセミナーの様子 (会場 森と水の源流館「川上村劇場」)

今回の授業づくりセミナーでは、奈良市・大和郡山市、橿原市、和歌山県橋本市から現職教員が参加し、吉野川分水、紀の川の「水の恵み」に焦点を当て、おいしい米や野菜のもとになる「いい水」をつくる源流での取組や、吉野林業について教材化し、授業にするもので、7月から翌年1月までの間で5回にわたって、森と水の源流館で開催をしました。指導案作成から授業実践・記録作成を行う教員に対して、大学教員・指導主事が授業デザイン等のスーパーバイズを行いました。わらわらは教育資源や人材と教員をつなぐコーディネート役割を担いました。

教材化における連携・協働

この事業のポイントは、学校教育機関と博物館等の社会教育施設が連携・協働することで、森と水の源流館スタッフから専門的な知識と、本財団の有する紀の川(吉野川)や吉野川分水流域をネットワークする情報が教材化の中で役に立つたようです。またわれわれも授業を設計する先生のご苦労と情報や資源を提供するタイミングなど学ぶことができました。



目標を通過。さらに、これから!



川上村での水辺の生き物観察を取り入れた授業 (奈良市立平城小学校)

実は森と水の源流館ができた時から、ここが学校の先生の集まる場となることを目標にしていました。これまでに県や市などの教育研究所などによる単発の研修会の会場となることはありましたが、本年度の取組は実際に行う授業を先生たちが研究し、話し合い、創っていく、発表・共有する場で、これこそが当初に描いた目標でありました。

この取組を次年度以降もさらに継続しながら、ESDの広がりや深まりのために役割が担えるよう、われわれスタッフ一人一人の質を高める努力が求められていると思います。

2 008年4月から始まった「達ちゃんクラブ」は、こないだの「手作り味噌に挑戦」(2018年2月10日実施)をもって、とうとう終りの日を迎えた。「最終回にして、やっぱりの日を迎えた」と、小学校の娘さんと参加できました」と、小学校の娘さんと名張から来てくれた人もおいたら、「最後と聞いて駆けつけてきたよ」といったおなじみさんもおつて、ほんま大勢の人が参加してくれて、最後の日を過ごすことができた。

こ うやって体験を通じて、川上村のことを知ってもらい、街の人と村の人が交流できたらいいなあと思って始めた「達ちゃんクラブ」も、事務局に確認したら、この20年間、体験プログラムが全部で231回、合計8362人が参加してくれたそうや。ほんまありがたいことやと、感謝している。こんなに長く続けてくれたのも、みんなの協力があってこそや。

60 歳で山の仕事も一線引いた後、過疎化が進む川上で、何かできさなやかなと、当時、もくもく館(川上村林業資料館)のスタッフと、手さぐりで始めたのが最初やった。記念すべき一回目のプログラムは山菜の天ぷら。「3人でも来たら、やるで」といつてたんやけど、ふた開けたら、27人の申込があつて、ほんま驚いた。街の人もやってみたいと思つてたんやなど。おかげで毎月の定員は30名やけど、いつも倍近くの申込があつたそうや。

そ こから毎月、山歩きや山遊びはわしの担当、ちまきやこんにやく、味噌などの郷土料理

の体験は、おかちゃん(妻)が先生となつてやつてくれた。スタッフも、村のこと、山のことをよく知つとる川上の住民や、今まで参加してくれてた人が「勉強したい」と協力してくれるようになっていったのも、ありがたかつた。

わ しもこれをやるのに、自然観察指導員の資格もとつた。ただ山のことを知つとる、いろんな体験ができるだけやつたらあかんやろ、世の中に通ずるものがないと信用されん。もし何か始めようと思つとる人がおつたら、資格はあつて損はないで。

ま た安全面には細心の注意をはらつた。地理的なことは分かつとるけど、開催日直前には必ず道を確認して、木が倒れたり、道の故障があつたら、すぐに直して準備した。事故があつたら、すべて終わりやからな。何度確認してもしすぎ



達ちゃんが語る

子どもたちに伝えたい「源流学」

⑭達ちゃんクラブの卒業式



ることはないんや。おかげさんで大きな事故やけがもなかつた。

こ うやって振り返つてみると、思い出はなんぼでも出てくる。最初のころは、こんなわしでもお客さんの前で話すのは緊張したもんで、飽きられずに話を聞いてもらうにはどうしたらええやろうと考へた結果、スタッフにビデオを撮つてもらつて、お客さんの関心がどこにあるのかを探つたりしたこともあつたなあ。

ま た山歩きときは、参加者の様子を見ながら、休憩場所や昼食場所を決めたりした。もちろん、事前に、だいたいの行程は決めとるけど、参加者によつてペースも違ふから、顔を見ながら、「はらへつたけ、ごはんはしよか」というように尋ねて場所を決めたりして、その場の雰囲気を楽しんだ。

今 から思つたら。そういうことがよかつたのかもしれん。リーダーとか、

指導者とか、お客さんと線を引かんと、わしも一緒になつて、自然を楽しんだり、わいわいすることがよかつたのかもしれない。わしらは月に1べんしかせえへんだけど、参加者の中には、友人つれて、わしが案内したところに連れてつてくれたり、川上のホテルに泊まつたりして、わたみたいで、当初の目標は達成できたと思う。

わ しも80歳を過ぎ、そろそろ無理がきかんようになってきて、20年を吉祥に引退を決めた。

まわりから「手伝うから辞めやんとやつてほしい」と言われたけど、やつぱり次の世代の子らが中心になつてやつていかなあかん。やつてくれるんやつたら、なんぼでも手伝うんやけど、なかなか後継者は探しても、出てけえへんだ。どうも「達ちゃん」という冠がついとるから、それがあかんらしい。今まで参加してくれた人の名簿もあるし、ほんまもつたないことや。まあ関わつてくれた人らで、なんか企画してくれとらしいから、そんなときは、わしも協力したいと思う。

何 度もいうけど、ほんまスタッフがあつて、ここまでこれたんや。ほんま、おおきに。落ち着いたら、

達ちゃんクラブの活動を、紙物で残したいと思とる。まあ気長にまつといや。



※連載では、「聞き書き」でコミュニティライターの西久保智美が担当します。

は分かりません。

このように、風媒花にも虫媒花にも一長一短があり、どちらが優れているとは一概には言えません。虫媒花は他者（動物や昆虫）に依存しないと次世代を残すことが出来ないため、マイナスが大きいのにも思えますが、植物の世界では裸子植物から被子植物へ、風媒花から虫媒花へと、大きな進化の流れの中にあるようです。環境の変化が激しい時代には、種を超えた助け合いが求められ、生物はお互いに力を合わせて、変化を克服しているのかもしれない。

さて、スギ、ヒノキと針葉樹の花粉が人々を悩ませている頃、被子植物の花々も少しずつ咲き始めてきます。雪解けの頃に地表に顔を出すフクジュソウや満を持して咲くといわれるマンサク、枝先に花序がぶら下がるキブシ（写真2）、新葉が展開する前に花を広げるロウバイ、アブラチャン（写真3）、クロモジなど、春先の林道歩きは、春の花々に目を奪われます。足元にひっそりと咲くネコノメソウの仲間（写真4）も小さい声で春の訪れを告げています。これらの春の花々の多くは、黄色い花を付けます。上にあげた植物は意図的に黄色い花を付けるものをあげました。ヤブツバキやサザンカのように赤やピンクの花を付ける植物もあり、セツブンソウやユキワリソウのような白い花、オオイヌノフグリのコバルトブルーなど、黄色以外の春の花もありますが、春の花には黄色の印象が強いです。虫媒花は昆虫に送粉を媒介してもらいますが、昆虫に花の位置を知ってもらう必要があります。そのため、ヒサカキのように独特の香り（沢庵のような、ラーメン汁のような香り）を放つ植物もあれば、特定の色の花を咲かせて開花を昆虫に伝える植物もあります。春先の植物を訪れる訪花昆虫の多くはアブやハエの仲間です。ヒサカキの独特な香りもハエなどの昆虫類を引き寄せるためのものです。黄色い花を付けるロウバイは春先にフローラルな香りを放ちますが、春の黄色い花を付ける植物の多くは、そうではありません。人には感じない程の淡い香りです。昆虫を集めているのかもしれませんが、色そのものが昆虫類を引き寄せることが知られています。アブやハエの仲間には、早春にいち早く活動を始めるものが多いのですが、これらの昆虫は黄色い色に敏感だといわれています。昆虫の目は人間とは構造がだいぶ違いますが、明暗と色彩を感じることが出来るのは共通です。ただし、色彩を感じる受容の仕方が異なっており、人よりも短い光の波長の光に見える色に偏っているようです。人が受容できない300nm程度の紫外線を昆虫は見る事が出来ますが、私たちが赤く見えている色の波長は昆虫には受容できません。昆虫が実際にはどのように世界を見ているのかはよく分かりませんが（写真5）、人間の目に黄色に写る花々は、実は淡い青色に写っているのかもしれない。人の目には黄色が目立つ春の花々ですが、昆虫にはカラフルな色の世界が広がっており、このカラフルな色に惹かれて目的とする花々にたどり着くのでしょうか。私たちには見えないところで、植物の花々と昆虫たちとの駆け引きが続いているのです。実は、こういった植物と昆虫との関係が、花の形態や香り、色等の様々な多様化を生み出し、それぞれの花に適した昆虫たちを生み出してきたと考えられています。このようなお互いに助け合いつつ多様化を生み出したプロセスは、共進化として知られています。



写真5 昆虫の目で見えたタンポポ（左）  
（Hanlon2007より転載）

スギをはじめとする裸子植物の世界は、他のグループとの依存関係を強めた被子植物という新しいグループへの世界へと移り変わりつつあります。厳しい冬の中にありながら命の躍動を感じる春の時に、花粉症に悩まされながら春を思う時に、花粉を巡る植物たちの攻防に心をとめてみると、春の訪れを違った観点から味わうことが出来るのではないのでしょうか。

参考文献・URL

早春に黄色い花が多い理由（日本植物生理学会「みんなのひろば」）

[https://jspp.org/hiroba/q\\_and\\_a/detail.html?id=2524](https://jspp.org/hiroba/q_and_a/detail.html?id=2524)

Hanlon, M. (2007) A bees-eye view: How insects see flowers very differently to us. [dailymail.co.uk http://www.dailymail.co.uk/sciencetech/article-473897/A-bees-eye-view-How-insects-flowers-differently-us.html](http://www.dailymail.co.uk/sciencetech/article-473897/A-bees-eye-view-How-insects-flowers-differently-us.html)

写真1（2018年2月14日龍谷大学瀬田キャンパス） 写真2～4（2009年3月31日筏場～白倉又谷）

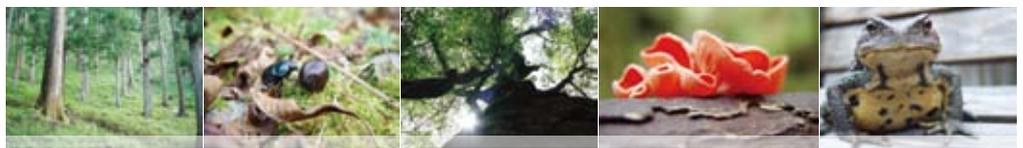
写真5（Hanlon 2007より転載）



写真3 アブラチャンの花。沢沿いに多いクスノキの仲間の植物。



写真4 ネコノメソウの仲間。花を取り囲むように周辺の葉が黄変する。



# 春を告げる花々

今年は例年にない寒さの厳しい冬となりました。そんな中でも春の足音がきかれるようになっていきます。今回はそんな春を告げる花々に思いを馳せながら、自然界のメカニズムの一端をのぞいてみようと思います。

横田岳人（龍谷大学理工学部准教授、日本森林学会会員）



写真1 スギの雄花序。そろそろ成熟して花粉の飛散が始まる

2018年の冬は、各地から豪雪の便りを聞く寒さの厳しい冬です。そんな厳しい寒さの中にあっても、立春を越える頃から少しずつ春に向けての足音が聞こえ、春の訪れを感じさせるようになりました。寒さが緩み日差しが暖かく感じられるのも春の訪れかもしれませんが、春の花々を見て感じる方もおられるでしょう。ロウバイやヒサカキのように香りで春を告げてくれる花々もあります。あるいは、目尻が痒くなりクシャミが止まらなくなって春の訪れを感じる方もおられるかも。

川上村に広く植えられ、村を代表する樹木ともいえるスギ（写真1）も春に花を咲かせます。花を咲かせるといっても、教科書に出てくるよ

うな美しい花ではなく、花粉症の原因として嫌われるような花です。花を咲かせる植物を顕花植物といますが、顕花植物は大きく裸子植物と被子植物に分けられます。将来種子になる部分を胚珠といますが、胚珠が子房という組織で覆われているのが被子植物、胚珠が子房で覆われきらずに一部が裸出しているのが裸子植物です。スギ、ヒノキ、ゴヨウマツ、トガサワラ、コウヤマキといった川上村で馴染みのある針葉樹は全て裸子植物ですし、イチヨウやソテツも裸子植物に属しています。裸子植物の花は、雄花と雌花に分かれており、風の力で雄花の花粉を雌花にとどけることで受精が成立し、種子が出来ます。しかし、風まかせの花粉の散布では、雄花からの花粉が雌花にたどり着くのは運頼みになります。スギの花粉がヒノキに付いても受精には至りませんから、スギの花粉はスギの雌花に飛来する必要があります。スギ、ヒノキ、アカマツと花粉飛散の時期が異なりますが、これらの樹種の花期が微妙にズレるのは、お互いの花粉が付着するのを避けるためかもしれません。雄花は少しでも雌花にたどり着く花粉を増やすために、散布する花粉全体を増やします。こうして大量に環境中に放出された花粉が、悪名高い花粉症の原因となり、アレルギーを持つ方々を苦しめることになるのです。

一方、多くの人が美しいと感じる花を付けるのは、被子植物に属する植物たちです。裸子植物は主に風を用いて花粉を運んでもらう風媒花を付けますが、被子植物は昆虫をはじめとする動物に花粉を運んでもらう虫媒花を付けるものが多いのが特徴です。もちろん、ヒメヤシャブシやヤマハシノキのように風媒花を付ける被子植物も多く存在しますが、「被子植物には虫媒花がある」というのが今の植物世界を読み解く一つの鍵になっているため、その点をご紹介します。虫媒花は、生物の働きを利用して花粉を運んでもらうもので、雄花から雌花（両性花の場合は雄蕊から雌蕊）に確実に花粉が運ばれることになり、授粉の効率が良いといえます。特に同じ種の植物の花がまとまって咲いていれば、花から花へと花粉を運んでもらえるため、他の種の花粉と混じることなく同じ種の花粉を確実に受粉へと結びついていきます。ただし、動物はタダで花粉を運んであげるようなお人好しではありません。その対価を要求しています。花粉運搬の対価は、花蜜や花粉そのものです。虫媒花は散布者である動物に花蜜や花粉を提供して花粉を運んでもらうのです。花粉を作るコストの一部を割いて蜜を作り、また運んでもらうはずの花粉も一部は食べられることになります。これはこれで高く付くことになります。また、媒介者である動物は、自分たちの得られる利益を最大にするように行動すると考えられます。すなわち、まとまって咲いている花の周辺では、次々に近場の花を訪れて花粉を媒介するとともに、花粉や花蜜を集めることになります。植物の立場からみると、自分の花粉は近隣の花々に散布されることにはなりますが、遠くの個体にまで運んでもらえることは少なそうです。これでは、遺伝的な交流を行うという花の役割が十分に果たしているか



写真2 キブシの花序。三之公の林道沿いにもふつうに見られる。

## その二七

歴史担当の成瀬匡章が、吉野川・紀の川流域の遺跡について紹介します

## 「丹治の瓦窯」

吉野町丹治には鎌倉時代の瓦窯があります。最近ここで焼かれた瓦が、金峯山寺や比曽寺（世尊寺 大淀町）で使われたらしいことが分かってきました。

金峯山寺蔵王堂は、平安時代の創建から少なくとも4回再建されています。現在の檜皮葺の蔵王堂は、天正19（1592）年のもので、それ以前は瓦葺の建物だったと考えられています。この4回の内、文永年間（1264

（74）の再建には、真言律宗の叡尊（1201～90）が関与したと考えられています。

叡尊といってもあまり馴染みがないと思いますが、その業績は親鸞や日蓮に劣るものではありません。現在の和歌山県に生まれ、醍醐寺（京都市）や高野山などで修行した叡尊は、西大寺（奈良市）を拠点として、廃れかけていた戒律（僧侶としてあるべき規範）を復興し、多くの寺院を再興しました。社会的弱者への布教・救済も積極的に行い、後醍醐天皇や北条時頼（鎌倉幕府執権）からも篤い信頼を寄せられていました。

叡尊は吉野と関係が深い人物でした。『沙石集』には吉野山執行春誉が弟子となった話があり、文永9（1272）年に金峯山寺で1721人に戒律を授けた記録もあります。蔵王堂再建の責任者として金峯山寺鐘（文永元（1264）年。現存せず）に名前が刻まれた実円は叡尊の弟子とされ、作者の丹治久友（河内鑄物師 鎌倉大仏を鑄造）も、叡尊の弟子源海が作らせた茨城県土浦市般若寺鐘（建治元（1275）年）を鑄造する

など真言律宗と関わりがありました。比曽寺も、金峯山寺の春豪が再建して、叡尊が管理したと伝えられており、実際に鎌倉時代後期に大規模な寺地の造成が行われ、西大寺と同文様の軒平瓦が使われたことが判明しています。

図2は採集された瓦です。1は平瓦で、菱形の叩き文様が見られます。2は連珠文軒平瓦、3は蓮華唐草文軒平瓦です。瓦の文様や製作技法、砂礫分析（註1）から、鎌倉時代後期に金峯山寺や比曽寺の瓦が焼かれていたのは間違いないさそうですが、なぜ丹治だったのでしょうか。それを解くヒントになりそうなのが丹治の住人誓阿尼が、西大寺に田畑を寄進した記録（『西大寺田園目録』）です。

おそらく金峯山寺に縁が深く、叡尊や真言律宗を支援する有力者が丹治に住んでおり、その関係から蔵王堂や比曽寺再建の拠点が置かれ、瓦窯も築かれたのでしょう。「丹治」という地名も真言律宗とともに蔵王堂再建に関わっていた丹治久友に由来すると思われるのは飛躍が過ぎるでしょうか？

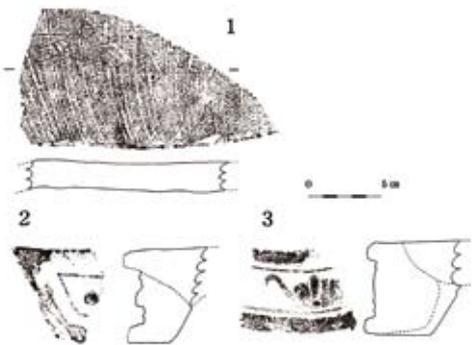


図2 丹治で採集された瓦（鎌倉時代）

註1 奥田尚氏（奈良県立橿原考古学研究所共同研究員）のご教示による。

## 参考文献

首藤善樹編 2000 『金峯山寺史料集成』国書刊行会

大淀町教育委員会編 2008

『大淀町文化財調査報告第4集 平成17・18年度 大淀町文化財調査報告 史跡比曽寺跡・大淀桜ヶ丘遺跡』

堺市博物館編 2017 『河内鑄物師の誇りⅣ―鎌倉大仏の鑄造と東国の鑄物師―』



図1 金峯山寺蔵王堂（吉野町吉野山）



講師に総谷文清氏（しだとこけ談話会）、アシスタントに山田香菜子さんを招き、吉野町教育委員会の協力で、12人の参加者で実施しました。11時に吉野町宮滝の吉野歴史資料館に集合し、館内で総谷氏によるシダの基本的なレクチャーを聞いた後、喜佐谷方面を高滝までシダを観察しました。

ゆつくりと一種ずつ特徴を説明いただきましたので、参加者の皆さんも、最初は同じように見えたシダの区別が少しずつ分かるようになりました。研究者の中でも種としての扱いが混乱しているヤマヤブソテツ（最近の図鑑ではヤブソテツの一形として扱われている）についてもヤブソテツとの区別点があることを説明していただくなど、最新の研究状況に即して、お話ししていただきました。

ルート中には、人里から里山にかけて生育する種が多く観察されました。普通に歩けば、20分



説明をする総谷氏



図鑑ではヤブソテツとされているヤマヤブソテツ

ほどの距離ですが、観察しながら歩くとたっぷり3時間でも足りないほどでした。

## 【観察種】：16科49種

- [ヒカゲノカズラ科] トUGEシバ/ヒカゲノカズラ
- [イワヒバ科] カタヒバ/クラマゴケ/ヒメクラマゴケ
- [トクサ科] スギナ
- [ゼンマイ科] ゼンマイ
- [ウラボシ科] ウラボシ/コシダ
- [カニクサ科] カニクサ
- [キジノオシダ科] オオキジノオ/キジノオシダ
- [コバノイシカグマ科] イヌシダ/イワヒメワラビ/コバノイシカグマ/フモトシダ/ワラビ
- [イノモトソウ科] イノモトソウ/イワガネゼンマイ/イワガネソウ/オオバノイノモトソウ/オオバノハチジョウシダ/クジャクシダ/タチシノブ
- [ナヨシダ科] ウスヒメワラビ
- [チャセンシダ科] イヌチャセンシダ/コバノヒノキシダ/チャセンシダ/トラノオシダ/ホウビシダ
- [ヒメシダ科] イブキシダ/オオゲジゲシダ/コゲジゲシダ/ハリガネワラビ/ホシダ/ミゾシダ/ヤワラシダ
- [シシガシラ科] シシガシラ
- [メシダ科] イヌワラビ/オオヒメワラビ/ × オオホソバシケシダ/オニヒカゲワラビ/シケシダ/シケチシダ/ノコギリシダ/ヒロハイヌワラビ
- [オシダ科] イノデ/イノデモドキ/オオイタチシダ/オオカナワラビ/オオキヨズミシダ/オニカナワラビ/カタイノデ/ × キヨズミイノデ/クマワラビ/サイゴクイノデ/サイゴクベニシダ/ジュウモンジシダ/テリハヤブソテツ/ハカタシダ/ヒメカナワラビ/ベニシダ/マルバベニシダ/ヤブソテツ/リョウメンシダ
- [ウラボシ科] クリハラン/ノキシノブ/マメヅタ/ミツデウラボシ

× オオホソバシケシダは雑種で、シケシダ × ホソバシケシダ  
× キヨズミイノデは雑種で、イノデモドキ × サイゴクイノデ



コケの名前が付くシダであるクラマゴケ



中学校の理科の教科書に登場することがあるイヌワラビ

## 源流学の森づくり

11月25日(土)

源流学の森づくりとは、20年ほど前に伐採され、再生しつつある天然林を立派な源流の森に戻そうという取り組みです。

今年はスズメバチが多く、山小屋に入る時に覚悟が必要でした。しかし、11月も末頃になると動き回ることもなく、人は火が恋しくなります。しかし、この取り組みでは燃料も自分たちで調達しなければなりません。この日は6名の参加があり、大人も子供も一緒に頑張りました。森の手入れで伐った木は、上手く並べて土留めにしたたり、林内の歩道を補修したり、その場で使うことが多いですが、適当な長さに小切って軒先に積み上げると、薪ができていきます。

これからの季節だんだんと気温も水温



も下がるため、囲炉裏の暖に、風呂焚きに、あっという間に使い切ってしまうのでたくさん準備が必要です。あれこれ手分けして冬に供えました。そして、素麺とたつぷりの根菜が入った川上村の雑炊「みい」を食べて体の中から暖まった後、再び冬支度が続けます。機会があれば炭焼きをしたいところです。

また、このすぐ近くには和歌山市さんが水源地主保護に取り組む森や、関西電力労働組合の本店地区・大阪南地区本部の組合員さんたちが森林環境保全のために手入れをする森もあり、当初に比べて何処も木が大きくなり、森が育ってきたと感じられるようになりました。

これからの世代に豊かな自然・環境とともに、活動の記録を残していければと思います。



森と水の源流館では、館内の「葉っぱギャラリー」に展示する作品を公募しており、今回は源流人会の中島裕子さんに展示していただきました。

中島さんは大阪府羽曳野市にお住まいの管理栄養士さんで、「水源地の森ツアー」に参加した際ご覧になった「水源地の森」の美しさに魅かれて川上村に通われるようになりました。その中で川上



多くの方々に見ていただきました。

村には「水源地の森」以外にも、村民の人柄、良い水と美味しいものなど様々な魅力があることに気づかれ、その思い出を趣味にされている絵画に描きためられました。今回、その内の貼り絵2点・油絵6点と、作品の解説と川上村での思い出を描いたイラスト6点の計14点の作品をお借りして展示しました。



貼り絵の作品

## 源流人募集

**源流人とは** かけがえのない水を生む源流の自然を愛し、源流を守り、育てる人です

**源流人会とは** 集い、話し、遊び、学び、考え、触れ、交流し、参加し、喜びを分かち合いながら、源流を守り、育ててゆこうとする会です

ともに源流学を楽しみ学ぶ仲間を紹介ください

年会費  
個人 2,000円  
家族 3,000円  
学生 1,000円  
団体 10,000円

郵便振替 00940-1-331163

## 水源地の森守募金

にご協力ください

ありがとうございました。

平成28年度、184,758円の森守募金をお預かりしました。奈良県内すべてと、和歌山県内の紀の川流域市町村の小学

4年生全員に配布した教材印刷費や源流域での斜面崩壊対策費用にあてさせていただきました。今後ともご支援をよろしくお願いします。



郵便振替 00950-2-331164 「水源地の森守募金」あて